

施設実習における実習施設種と実習先の決定方法による学びの差異

松 藤 光 生 中 村 恭 子

The Differences in Learning through Practice Training in Different Types of Welfare Facilities and Methods of Allocating Facility

Mitsuo Matsufuji

Kyoko Nakamura

1. 問題と目的

2015年4月より子ども子育て支援新制度が本格施行される中、待機児童解消のための保育士確保が早急の課題とされているが、それと同時に保育の質、並びにその保育を担う保育士の質の向上も重要な課題となる。保育士養成課程においては、様々な専門科目の履修が求められ、その中でも実習科目の履修は必修となっている。実習では保育所での実習に加え、保育所以外の児童福祉施設や障害者支援施設等での実習（以下、施設実習）がある。保育士資格を目指す学生の多くは、保育所での保育士として働くことをイメージしており、他の児童福祉施設や障害者支援施設での保育士をイメージしておらず、施設での就職を希望していないことも多い（大和田ら、2014；多田内・重永、2014）ことが報告されている。しかし保育士は、児童養護施設や障害児入所施設などにおいて被虐待児や障害児に対して専門的な保育を実践出来ることが求められている。そういった状況において、施設実習は、学生の施設に対する理解や意識を変え、多様な発達段階や状況にある児童を理解し、専門性を高める上で非常に重要な機会となる。施設実習を経る事で、施設に対する意識の変化（多田内・重永；2014、土谷；2006）があること、直接的な援助方法や利用者児の特性理解など多くの面で学びがあったこと（藤重；2014）も示されており、また山口（2007）は、実習前後で学生の自己効力感といきがい感が肯定的に変化したことを報告しており、学生にとって施設実習経験が多様な面で影響を与えることが考えられる。この施設実習で対象となる施設は、表1に示されるように多様な種類となっているが、学生が実習で体験出来る施設は、多くの場合一つないしは二つとなっていることが現状である。施設種によって接する児童の年齢や特徴、実習内容が異なっており、そこでの学生の体験や学びも大きく異なっているおり、土谷（2006）や石山ら（2010）の報告では、施設種により学生の学びや「気づき」などに相違が見られたと報告している。保育士の質を高める上では、全ての児童

福祉施設やそこで求められる技術、知識について十分に理解することが必要になる。そのように考えた場合、質の高い保育士の養成を目指す上で、それぞれの実習施設における体験や学びについて把握しておくことが重要になると思われる。松藤（2016）においては、施設種による学びの差異を検討し、それぞれの施設種においてその施設を利用している対象者についての理解がより深められることや、保育士からの直接的な指導は、障害児支援施設が多く受けることが出来、母子生活支援施設は、保育士からの指導を受ける機会は少ないが、保護者支援についての理解をより深めることが出来ることなど、各施設種における学びや体験の差や傾向が明らかにされた。

表1. 施設実習の主な実習先

施設種	概 要
乳児院	主に2歳までの乳児を保護者に代わって養育する施設
児童養護施設	主に2歳～18歳の児童を保護者に代わって養育する施設
母子生活支援施設	母子に生活環境を提供すると共に自立の支援を行う施設
情緒障害児短期治療施設	情緒障害を抱える児童を入所させ、治療と共に自立の支援を行う施設
児童自立支援施設	子どもの行動上の問題、環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ指導と自立の支援を行う施設
障害児入所施設	知的障害、肢体不自由児、視聴覚障害等を抱える児童を入所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
児童発達支援センター	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童（主に幼児）を通所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
障害者支援施設	18歳以上の障害者を入所させ、日常生活、社会生活を支援する施設
指定障害福祉サービス事業所	18歳以上の障害者を通所させ、日常生活支援や就労支援、自立に向けた支援を行う施設

しかし主に通園により支援を行う児童発達支援センターと入所による支援を行う障害児入所施設を障害児支援施設として同じ施設種と扱った上で検討を行っている点などに課題が残される結果となった。通園での支援と入所での支援では、支援の内容も大きく異なり、また支援の対象に関しても児童発達支援センターの主な対象が幼児であるのに対し、障害児入所施設においては、「平成24年度全国知的障害児入所施設実態調査報告」で18歳以上の過齢児の入所が30%を占めているという報告から示される様に大きく異なっており、障害児の支援施設に関しては、通園か入所かで区別しての検討が必要になると思われる。

また実習における学びや体験に影響を与える要因として、実習先施設をどのように決定したかも関わる可能性がある。実習先を決定するに当たっては、多くの場合、学生に実習を希望する施設について調査を行い決定していると思われる。古川（2016）では、実習先の希望理由と実際に希望した実習先で実習を行ったかを検討し、実習先の希望理由としては、「就職先として判断するため」「成長に役立ちそう」などが多いことや実習先が限定されている中でも、7割の学生が希望した実習先で実習を行えたことを報告している。しかし必ずしも全ての学生が希望した実習先で実習を出来ない場合、そのことが実習に対する意識や態度に影響を与えることも推察される。特に実習先の希望理由として、就職の意識や学びのためという積極的な理由付けを行っている場合、その希望した施設で実習を行えないことは、実習に対して動機付けにネガティブな影響を与える可能性も考えられる。実習先の決定に当たっては、可能な限り学生の希望が反映する形で決定することが望ましいと考えられるが、実際に実習先の決定の方法が異なることによって学生の学びや体験に差異があるのかについても検討する必要があると思われる。

以上より本研究では、多様な施設種がある施設実習において、施設種による学びや体験の差異について、松藤（2016）では検討が行えなかった障害児支援施設についても詳細に検討を行い、また実習先の決定方法の違いが影響を与えるのかについても検討を行い、質の高い保育士養成のための学生指導の知見を得ることを目的とする。

2. 方 法

(1)調査対象

A大学、保育士資格取得希望の4年生、X年度118名、X+1年度112名、計230名

実習先の決定については、X年度は、第1回の実習先

希望調査に基づき、実習先の確保を行った後、改めて学生に確保された実習先を示し、学生の協議によって実習先を決定した。X+1年度は、X年度の方法では、学生の協議による決定では、自分の希望ではなく一緒に実習に行く学生を基準に実習先を決定している様子や全く希望していない施設に実習先が決定してしまう学生が出てしまったため、方法を変更し、実習先を確保した後に改めて実習先の希望調査を行い、それに基づき教員が実習先の配属を行った。それにより全ての学生が第1希望～第3希望の施設で実習を行うことが可能になっている。なおX年度並びにX+1年度の実習指導担当教員は、同一者が行い、実習の事前指導の内容も同一の内容を実施している。

(2)調査内容

①フェイスシート

学生番号、実習先施設種、学生番号については、実習先施設との正誤を確認するためだけに用い、分析を行う上では、個人の特定は行っていない。また実習先施設に関しては、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、児童発達支援センター、障害児入所施設の5グループに分けてその後の分析を行った。なおそれぞれ施設種に実習に行った人数は、X年度は、乳児院28人、児童養護施設54人、母子生活支援施設16人、児童発達支援センター4人、障害児入所施設16人、X+1年度は、乳児院30人、児童養護施設40人、母子生活支援施設12人、児童発達支援センター18人、障害児入所施設12人である。また年度を分けての比較の際には、X年度の児童発達支援センターの人数が4人と極端に少なかったため、松藤（2016）と同様に、児童発達支援センターと障害児入所施設を障害児支援施設として合わせて4グループでの分析を行った。

②実習前後での施設イメージの変化

実習前後での施設へのイメージの変化を問うために、「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」「②保育所以外の施設への就職を考えるようになった」の2項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

③利用者の理解

施設利用者の理解について問うために、「①障害児に対しての理解が深まった」「②社会的養護の対象となる子どもについて理解が深まった」「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」の3項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

④実習学習尺度

実習における学びの内容を測る尺度として、松藤

(2016) で使用された実習学習尺度を使用した。実習学習尺度は、実習における学びや体験について問う11項目からなり、松藤(2016)により「利用者等との関わり・直接的援助」、「保育士からの指導」、「実習施設の理解」の3因子構造であることが示されている。

(3)調査時期

X年度、X+1年度共に、実習終了後第1回目となる実習指導の授業の中で実施をした。実習時期が学生によって異なるため、実習終了から1か月程度経過している学生もいれば、直前まで実習があった学生もいる中で

の実施となった。

3. 結果

(1)実習施設種による学びの差異

実習施設種により学びや体験に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、実習学習尺度のそれぞれの因子得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「利用者等との関わり・直接的援助」と「保育士からの指導」に関して有意な結果 ($F_{(4, 225)} = 3.99, p < .01$; $F_{(3, 225)} = 5.49, p < .01$) が、「実習施設

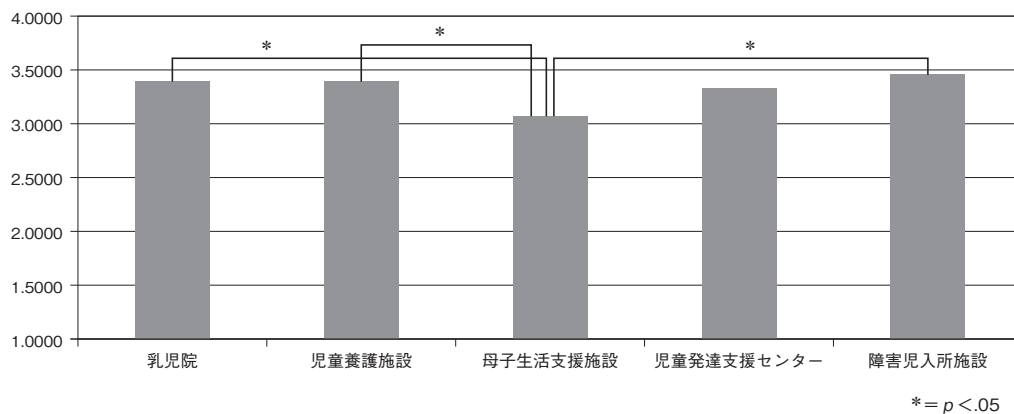


図1. 施設種による利用者等との関わり・直接的援助の差

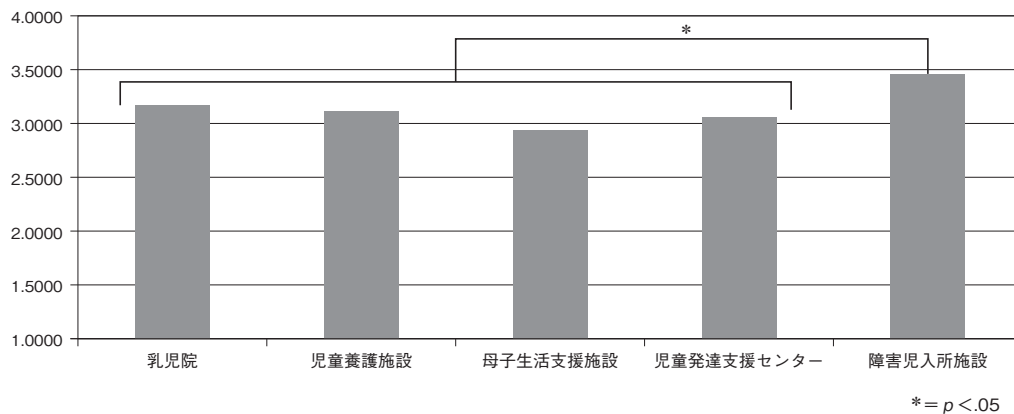


図2. 施設種による保育士からの指導の差

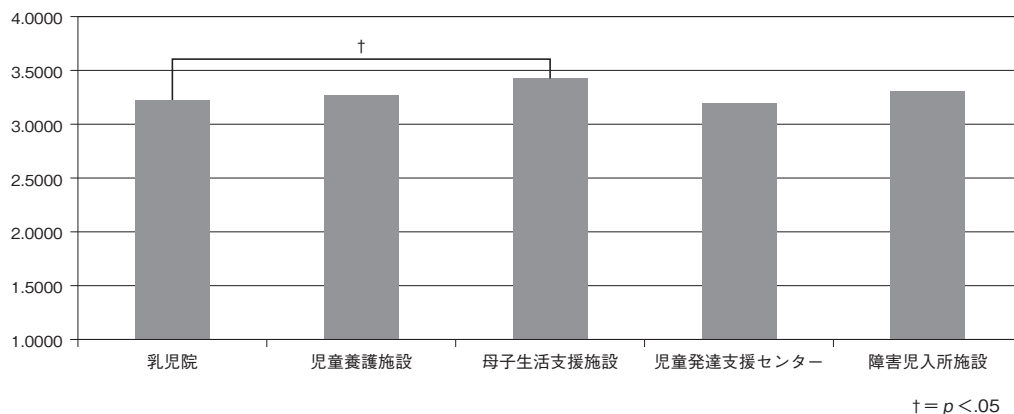


図3. 施設種による実習施設の理解の差

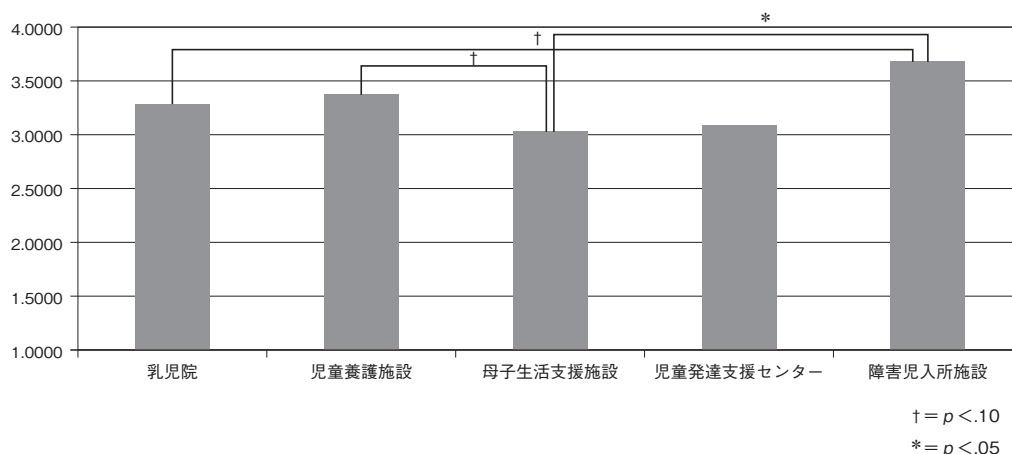


図4. 施設種による肯定的なイメージ変化の差

の理解」に関して有意傾向 ($F_{(3, 225)} = 2.04$, $p < .10$) が認められた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、「利用児者との関わり・直接的援助」に関しては、母子生活支援施設と比較して、乳児院、児童養護施設、障害児入所施設が有意に高い ($p < .05$) という結果が、「保育士からの指導」に関しては、他の4施設と比較して、障害児入所施設が有意に高い ($p < .05$) という結果が、「実習施設の理解」に関しては、乳児院と比較して母子生活支援施設が有意に高い傾向がある ($p < .10$) という結果が得られた (図1, 2, 3)。

(2)実習施設種による施設へのイメージ変化の差異

実習施設種により、実習後の施設へのイメージ変化に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、イメージ変化を問う項目2項目をそれぞれ点数化したものを従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」に関して有意な差が認められた ($F_{(4, 225)} = 5.16$, $p < .01$)。Tukeyによる多重比較の結果、母子生活支援施設と比較して、障害児入所施設の方が有意に高く ($p < .05$)、児童養護施設の方が有意に高い傾向 ($p < .10$)、乳児院と比較して障害児入所施設の方が有意に高い傾向 ($p < .10$) が認められた (図4)。

(3)実習施設種による利用者の理解の差異

実習施設種により、利用者の理解に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、利用者の理解を問う項目3項目それぞれを点数化したものを従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「①障害児に対しての理解が深まった」と「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」に関して有意な差が認められた ($F_{(4, 225)} = 24.84$, $p < .01$; $F_{(4, 225)} = 7.525$, $p < .01$)。Tukeyによる多重比較の結果、「①障害児に対しての理解が深まった」に関しては、他の3施設と比較して、児

童発達支援センターと障害児入所施設が有意に高い ($p < .01$; $p < .01$) という結果が得られた。「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」に関しては、児童養護施設・障害児入所施設と比較して母子生活支援施設が有意に高く ($p < .01$)、児童発達支援センターと比較して母子生活支援施設が有意に高い傾向 ($p < .10$) が、児童養護施設・障害児入所施設と比較して乳児院が有意に高い ($p < .05$) という結果が得られた (図5, 6)。

(4)実習施設種と実習先の決定方法による学びの差異

実習施設種と実習先の決定方法によって学びや体験に差異があるかを検討するために、実習施設種と実習先の決定方法を独立変数、実習学習尺度のそれぞれの因子得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。結果、「保育士からの指導」に関して有意な結果交互作用 ($F_{(3, 222)} = 7.39$, $p < .01$) が認められ、「利用児者との関わり・直接的援助」に関して有意な主効果 ($F_{(3, 222)} = 4.59$, $p < .01$) が、「実習施設の理解」に関して有意傾向 ($F_{(3, 222)} = 2.34$, $p < .10$) が認められた。交互作用が認められた「保育士からの指導」に関して、単純主効果の検定を行った結果、X年度において母子生活支援施設が他の3施設種よりも低く ($p < .05$)、障害児支援施設が他の3施設種よりも高い ($p < .01$) こと、母子生活支援施設においてX年度よりもX+1年度が高く ($p < .01$)、障害児支援施設においてX+1年度よりもX年度の方が高い ($p < .01$) が示された。(図7)

4. 考 察

(1)実習施設種による学びの差異について

分析の結果、「利用児者との関わり・直接的援助」に関しては、母子生活支援施設と比較して、乳児院、児童養護施設、障害児入所施設がより体験し学んでいるという結果が得られた。これは松藤 (2016) とほぼ同様の結

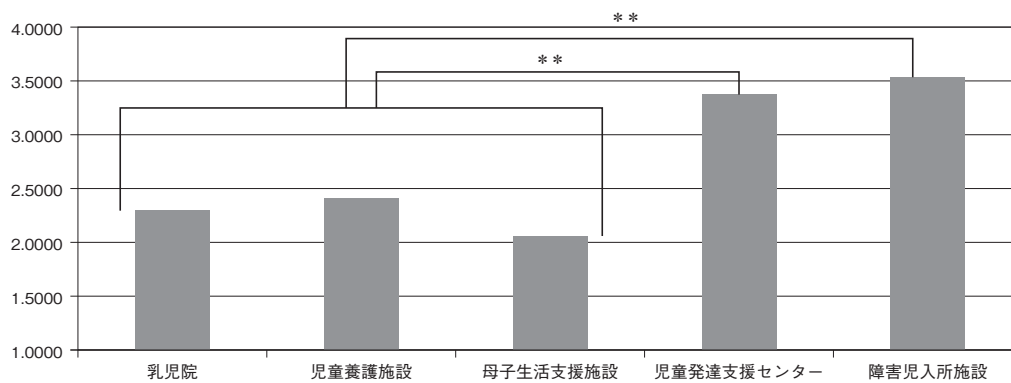


図5. 障害児に対しての理解の差

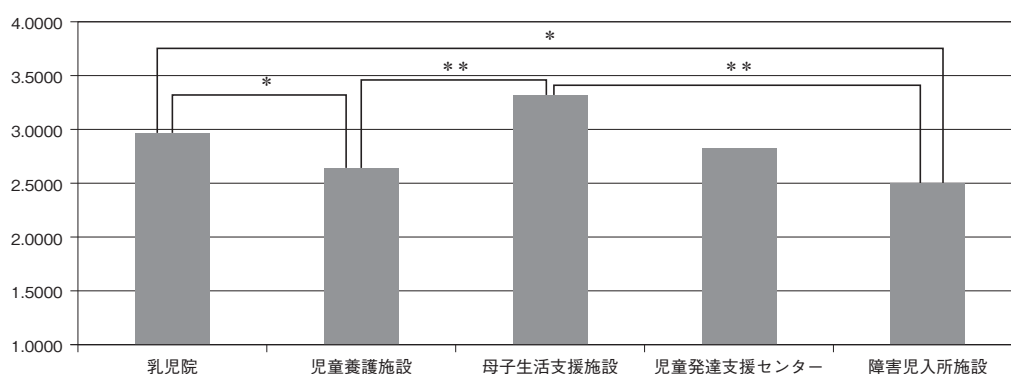


図6. 保護者支援の理解の差

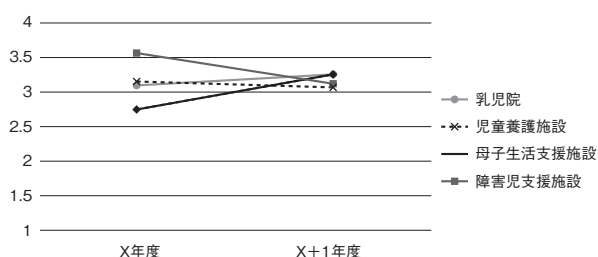


図7. 施設種と実習先決定方法による保育士からの指導の差

果であり、母子生活支援施設の施設としての特性が影響していると思われ、母子生活支援施設は、他の施設と比較し、児童と直接接する時間が短くなることが影響していると考えられる。しかし児童発達支援センターと母子生活支援施設の間には差が認められなかったため、これに関しては今後も詳細な検討が必要になると思われる。

次に「保育士からの指導」に関しては、障害児入所施設が他の施設よりも高いという結果が得られている。これに関しては、松藤（2016）で述べられた様に「実習に行く学生の多くは、障害児者との関わりの経験が多いとは言えず、知識としては理解していても実際の関わりの上では困難な点も多く存在したと思われる。だからこそ保育士からの直接的な指導も多くなったのではないかと推察される。しかし同じ障害児を支援する施設でも、通所の施設である児童発達支援センターと比較して、入所施設の方が高くなっている。これに関しては、

土谷（2006）が障害児系施設では逆に受け入れ準備があまり出来ていない可能性を述べており、特に障害児入所施設においては、他の施設と比較して実習指導体制が十分でないために、その場での直接的な指導が他の施設と比較して多くなってしまった可能性も考えられる。

また「実習施設の理解」に関しては、母子生活支援施設の方が乳児院と比較して高い傾向があるという結果が得られている。これに関しては、前述した様に母子生活支援施設は、児童と接する時間が短い反面、職員からの講義が実習中に行われる場合もあり、それにより実習施設に対する理解がより進む可能性も考えられる。

(2)実習施設種による施設へのイメージ変化の差異について

分析の結果、母子生活支援施設へ実習に行った学生と比較して、児童養護施設と障害児入所施設に実習に行った学生の方が、そして乳児院に行った学生と比較して障害児入所施設に実習に行った学生の方が児童福祉施設へのイメージがより肯定的に変わっている傾向が示された。障害児入所施設のイメージが特に肯定的に変化している点に関しては、障害児入所施設においては、18歳以上の過齢児が入所していることを事前学習の中などで知る事により、実習前の実習に対しての構えや不安が他の施設と比較して強くなっている可能性も考えられる。そのように実習前に高まった不安が、実習を行う中で対象児者への理解を得て、大きく肯定的に変化しているとも

考えられた。

(3)実習施設種による利用者の理解の差異について

分析の結果、障害児の理解に関しては、児童発達支援センターと障害児入所施設での実習が他の施設と比較して、より障害児の理解を促すことが示されていたが、これは上記2施設が障害児を支援するための施設での実習であることを考えると当然の結果であると思われる。しかし松藤（2016）では、母子生活支援施設と比較して児童養護施設での実習がより障害児への理解を促すという結果も示されていたが、本研究においては、その違いは認められなかった。これに関して、松藤（2016）では、「厚生労働省によるH25年児童養護施設入所児童等調査結果によると児童養護施設には、何らかの障害を抱える児童が28.5%いることが報告されており、そういった状況の中で児童養護施設での実習においても何らかの障害を抱える児童と関わる経験や指導を受ける中で障害児に対する理解が促されたのではないかとと思われる」と考察を行っていた。しかし同調査において母子生活支援施設においても17.6%の児童が何らかの障害を抱えていることが示されており、母子生活支援施設においても児童養護施設と比較して、同程度に障害児についての理解が得られるということを示していると思われる。

次に保護者支援のあり方については、児童養護施設・児童発達支援センター・障害児入所施設と比較して母子生活支援施設での実習の方が促されることが示された。これに関しては、松藤（2016）でも述べられている様に、母子生活支援施設は、施設内に母子が生活しているため、施設の方針としても母子への支援が重視されていることが多いことが影響していると思われる。また乳児院に関しても、児童養護施設・障害児入所施設よりも促されることが示されている。これに関しては、H25年児童養護施設入所児童等調査結果の家族との交流頻度の結果を見ると、「電話・手紙」「面会」「帰省」全てにおいて、児童養護施設と比較して乳児院の方が月1回以上の交流頻度が高く、乳児院においては頻繁に家族との交流が持たれていることが示されている。そのような状況で、乳児院の実習においては、保護者支援に直接でなくても触れる機会があったと推察され、その事が今回の結果につながったと思われる。藤重（2014）は、保護者支援や保護者対応に関して「養成校での学びとしては限界があるように思われる」とも述べており、その点に関しては、特に母子生活支援施設や乳児院での実習の中でより学びを深めることが出来ると思われる。

(4)実習施設種と実習先の決定方法による学びの差異について

分析の結果、X年度の方には見られた保育士からの指導の差が、X+1年度には見られないことが示された。このことは、方法で述べたように、X+1年度では、可能な限り多くの学生の希望を反映する形で実習先の決定を行ったことが影響していると考えられる。具体的には、母子生活支援施設に関しては、X年度と比較してX+1年度の方が高くなっており、この事は自身の希望の実習先に行く事により実習に対しての動機付けが高まり、実習の中でも積極的に保育士に指導を求めることが増えたと考えられる。一方、障害児支援施設に関しては、X+1年度の方が低くなっている。この点に関しては、考察(1)では学生は障害児との関わりの経験が少なく、そのため保育士からの直接的な指導を受ける経験が増えると述べたが、X+1年度においては、自身の希望の実習先となることにより、実習前より障害児の事に関して、自発的に学習を行い、基本的な理解や関わり方について身に着けた上で実習を行ったことにより、そういった基本的な事についての指導を受ける経験が少なくなったとも考えられた。

5. まとめと今後の課題

本研究の結果より、実習先の施設種により、学生の学びや体験に差があることが示され、松藤（2016）では行えなかった点についても検討が行えた。具体的には、同じ障害児を対象とした児童発達支援センターと障害児入所施設において、学びや体験に違いがあることが示され、それに関しては、児童発達支援センターと障害児入所施設では対象となる年齢が異なることなどが要因であると考えられた。また障害児入所施設での実習では、他の施設と比較し、関わりや援助について保育士より直接的な指導を受けることが多いことや実習後に施設に対して肯定的にイメージが変化することが明らかになったが、その要因を詳細に検討するためには、実際の指導の内容や実習前の施設に対してのイメージとの比較を行うことが必要になると思われる、その点は今後の課題と考えられる。

また保護者支援の理解に関しては、松藤（2016）では、母子生活支援施設が他の施設と比較して理解が促されることが示されていたが、今回乳児院における実習においても促される可能性も示された。しかし同じ保護者支援でも、母子生活支援施設と乳児院では、その目的や支援内容が異なることが予想される。今後は、理解が出来た支援の内容についても調査・検討が必要になると思われる。

加えて本研究では、実習先の決定方法により、学びに差異があるかの検討を行い、保育士からの直接的な指導に関して異なるという結果が示された。実習先の決定方法によって、自習先を希望する基準や希望通りに実習先が決まる学生の割合などが異なってくることが考えられる。結果として、より多くの学生が希望通りの施設で実習を行うことが可能になる方法を取る事により、実習に対しての動機付けが高まり、実習での積極的な学びや事前学習への取り組みを行う可能性が示された。しかしこの点に関して詳細な検討を行うためには、実習先を希望する理由や実際に希望に沿っていたかについても調査・検討が必要になると思われる。

今後の課題をまとめると、以下の点が挙げられる。①実習前の施設に対してのイメージを測定した上で、実習後の結果との比較・検討が必要、②児童発達支援センターや障害児入所施設に関しては、同じ施設種であっても、主として対象とする障害が異なる施設があり、それにより学びや体験に差があるかの検討が必要な点、③実習先の決定に関して、本人の満足度等を踏まえた上での検討が必要な点、④尺度では測定が困難な学びや体験の内容について質的な検討が必要な点。今後は、これらの課題についての検討が可能な調査・分析を行い、さらに実習における学びや体験について理解を深めた上で、有効な実習指導について検討を行うことが課題となる。

引用文献

- 藤重育子（2014）保育実習における学びと課題－施設実習後の学生の振り返りから－，東邦学誌，43(2)，160-170
- 古川隆幸（2016）学生の社会的養護施設への関心と施設実習先決定過程に関する一考察－佐賀女子短期大学学生へのアンケート調査より－，佐女短研究紀要，50，109-113
- 池田幸代・田中謙・前嶋元（2013）保育者養成校の施設実習における学生の学びの内容の分析，高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要，4，54-61
- 石山貴章・安部孝・田中誠（2010）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）－実習事後指導を通した「自己評価」と「気づき」に関する分析から－，九州ルーテル学院大学紀要，40，59-72
- 松藤光生・中村恭子（2016）施設実習における実習施設種による学びの差異，中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要，48，65-71
- 大和田明見・関根美保子・鈴木春江（2014）保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化，帝京大学教育学部紀要，2，275-284
- 多田内幸子・重永茂（2014）施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査，久留米信愛女学院短期大学研究紀要，37，69-76
- 土谷由美子（2006）施設実習に関する意欲と現状についてⅡ－学生のアンケートを中心に－中国学園紀要，4，85-90
- 山口直範（2007）養護施設実習における短大生の心的発達効果，岡山短期大学紀要，30，79-82